

【実践報告】

教養授業に取り入れた留学生との交流活動

— 異文化理解の一助として —

松瀬 成子・マスデン真理子

要 旨

近年、大学の国際化が叫ばれ、留学生についても目標数に向かって増え続けているが、日本人学生と留学生の多くは、言語面の制約があり、同じキャンパス内においても接点を持つことが少ない。本稿で紹介する活動は、日本人学生と留学生との交流のきっかけとなる場を授業で作ろうという試みである。

筆者らは教養授業と日本語クラスの合同授業を学期中に2、3回組み込み、インタビュー活動（口頭アンケート）やロールプレイを13年間行ってきた。大掛かりな交流でないからこそ実施上の負担が少なく、ささやかではあるが異文化理解の一助となっているものとする。

1. はじめに

本学では、2011年5月現在で375名の留学生が学習、研究を行っており、今後、国際化推進の一つの柱として、さらなる留学生の受け入れを目指している。しかしながら、キャンパス内に目を向けてみると、日本人学生の「国際化」に留学生の存在が十分に活かされているとはいいがたい。

キャンパスに留学生がいるにもかかわらず、接する機会がない日本人学生、また日本に留学しながら、日本人学生とのコミュニケーションの機会が少ない留学生、特に近年増加が著しい交換留学生については、日本語力の問題もあり、この傾向が強い。この両者をつなぐためのささやかな活動を、授業の一部を当てるといった形で1999年以来続けてきた。

2. 教養科目クラスと留学生日本語クラスの交流活動

松瀬は教養科目の授業の中で留学生との交流活動を取り入れてきた。以下に、その教養科目のクラスと日本語のクラス、および交流活動について述べる。

2. 1 教養科目クラスと日本人学生について

松瀬担当の授業科目のテーマ名は、「日本語を教える」「外国語としての日本語」「日本語の音声」など多少の変化はあったが、一貫して日本語あるいは日本語教育をテーマにしたものである。教養科目であるため、受講学生の専攻はさまざまである。また、受講者数も20名から70名程度と年度によって異なっている。これらの学生たちが、どの程度外国人とのコミュニケーション体験があるかを知るために、今年度の受講学生（54名）を対象にアンケートを実施し、45人の回答を得た。今回の合同授業以前に、外国語の授業以外で外国人と話したことがあるとした学生は36名（80%）だが、うち1、2回が10名、3～5回が9名と頻度は少ない。大学入学以降、学内の留学生と話したことがある学生は17名で、半数以下である。そのうち1、2回が6名、3～5回が3名で、日常的に話すとしたのは3名であった。また話す場所も教室が10名と最も多かった。

このアンケート結果、および、これまで活動に参加した日本人学生の活動後コメントから、コミュニケーションの機会は少なく、また話すといっても教室などで挨拶程度が多いことが察せられる。

2. 2 日本語クラスと留学生について

合同授業を行う日本語クラスは、初級後半から中上級までさまざまであった。月曜日の第2時限に松瀬担当の教養科目が置かれていたため、その時間帯に開講される日本語クラスの受講者が対象となったわけである。日本語クラスの内容は時間割の都合で、「会話」や「総合日本語」（総合教科書を利用するクラス）だけでなく、「漢字」のクラスだったこともあった。

例年、交流活動の留学生の比率は低いが、昨年度までの3年ほどは初中級と中級の2クラスが参加し、日本人学生と1対1になるということもあった。

以下に、その日本語クラスでの合同授業の位置づけを見るために「初中級会話」（マスデン担当）のクラスを例として挙げる。

このクラスの留学生は授業外に、どの程度日本語を使って日本人と交流しているのかを調べるため、簡単なアンケートを行った。その結果、①日本人の友だちが欲しいと強く思っているものの、友だちになる機会が少なく、留学生同士の付き合いが多い、②サークルに入っている留学生は一部にすぎず、日本人学生と同じ授業をとっている留学生も少ない、③留学生の方から積極的に声をかけ、友だちを作るのは難しいという実態が見えた。

初中級会話のクラスでは初級レベルを終了した日本語学習者（10名～20名程度）が週に1コマ（90分）、機能別の日常表現をロールプレイを通して学んでいる。コース前半で会話力の基礎を築いた上で、12週目から15週目までの3コマを合同授業の準備・日本人学生へのインタビュー・インタビュー結果の発表にあてている。

なお、授業ではこの活動を「インタビュー」と呼んでいるが、実際はあらかじめ考えた質問項目に答えてもらう「口頭によるアンケート」というべきものである。しかし、その質問項目の内容にとどまらず、理由を尋ねたり関連情報を得るなど、さらにそこから会話を発展させるという意味であえてインタビューと呼んでいる。

合同授業初期のころの参加者は、中国からの科目等履修生、研究生が大半であったが、この「初中級会話」は欧米からの交換留学生が過半数を占めるだけではなく、東南アジアの国々など国籍が多様である。

2. 3 交流活動の内容

初めに交流活動を企画したのは、教養科目の授業で外国人の日本語や日本語教育の問題に触れても、大半の学生は実際に日本語学習者に会ったことがなく、実感できないと思われたからである。ちょうど同じ時間帯に日本語クラスが開講されており、留学生たちに日本人とのコミュニケーションの機会を持たせたいと考えていた日本語クラス担当者の協力のもと、一挙両得の方法としてこの活動を始めた。

それぞれのクラスに制約があり、コース全体を日本人学生・留学生の混成クラスとすることはできないが、2、3回でも合同クラスを組み入れることにより、双方に新たな刺激や気づきが生まれればそれだけでも活動の意味があると考えた。

この13年間、合同クラスでは主にインタビュー活動を行ってきたが、その他にも、インタビューを行った留学生がどんな日本語教育を受けているかを見せるため、日本語授業の見学を行った。また、日本人学生の要望を受けて、インタビューの結果発表会を行ったこともある。2007年からは留学生とのロールプレイを追加した。以下にインタビュー活動とロールプレイの詳細について述べる。

2. 3. 1 インタビュー活動（口頭アンケート）

日本語初中級レベルの留学生に口頭アンケート的なインタビュー活動を採用したのは、日本語力の不足を補うためである。通常のインタビューのように発展的な会話は望めないが、質問文を事前に準備することができ、話の流れをある程度固定し、質問に対する回答も予測することができる。



インタビューの様子

1) インタビューまでの流れ

①テーマ設定と質問文作成

日本人大学生に聞いてみたいことについて、テーマを設定し⁽¹⁾、そのテーマを選んだ理由、インタビューの5つの質問文を書いてくる。

②インタビュー練習

ペアになり、「インタビュー練習」を行う。まず、自己紹介をし、相手の学部、学年、氏名等を尋ね、テーマ選択の理由を説明し、質問に入る。ペアの相手を変えて繰り返し練習することで、発話をスムーズにするだけでなく、その反応の違いから、本番での回答の予測もしやすくなる。

2) インタビュー実施

インタビューは1対1が基本であるが、筆者らの活動には、留学生に対して日本人学生は2～4倍の数が参加するため、各グループに1名ずつ留学生が入るようグループ分けする。

この時、日本人学生が仲間同士で固まらないようにくじでグループを決める。1回のインタビューはおよそ10分とし、これを授業時間内に5～6回繰り返す。また、留学生が移動するごとに、日本人グループのインタビューの相手役も交代し、全員が1回以上インタビューに答える。グループ内のインタビューを受けていない日本人学生は、インタビューの様子を観察する。

観察者としての利点は少なくない。ウォーカー泉（2011）によると、参加者は会話の理解と表現を行うが、観察者は理解行為に注意を集中できるため、「気づき」を得やすくなるのではないかと捉えている⁽²⁾。つまり、留学生と日本人学生の数のアンバランスはむしろプラスとも考えられる。

残りの10分程度はお茶などを飲みながら、最後のグループで自由会話を楽しむ。昼食前の時間帯であるため、この後いっしょに昼ご飯を食べに行くグループもある。

3) インタビュー結果の発表

インタビューの結果は、日本語クラスで発表する。初中級会話の授業では、発表プリント（資料参考）を参考にしながら、結果や感想を簡単に述べる程度にしている。中級レベル以上のときは、日本人学生を聴衆として発表することもある。

4) インタビュー活動の意義と留意点

インタビュー活動は留学生も日本人学生もともに満足度が高く、初対面の日本人と日本語でコミュニケーションができたことが自信となり、さらに意欲が高まる。

日本人学生も、普段の講義では見られないような生き生きとした表情で、熱心に話している姿が観察できる。活動後のアンケート^③では、ほとんどの学生から、楽しかった、もう一度やりたい、こちらからもいろいろ聞きたかった、など満足を示す感想が聞かれ、それぞれの国の学生と自分たちとの共通点や相違点などの発見が報告される。また、多く見られるのが、自分たちの英語のスピーキング力と留学生たちの日本語を話す能力を比較するコメントである。自分たちより学習期間がずっと短いのにこんなに話せるとはと驚き、反省し、これからもっと英語をがんばろうと、自らの外国語学習への刺激としている。

インタビュー活動（口頭アンケート）について留意すべき点は、この活動が情報取りを目的とするタスクというより、コミュニケーションをするための仕掛けという位置づけであることを参加者に意識化させることである。この点をよく理解させておかないと、一問一答式のやりとりで終始する可能性がある^④。実際、より多くのデータを収集することを目的と考える留学生は、本来10分で一人にインタビューをするところを1人2分程度で済ませ、グループ全員のデータ取りをして満足している。また、極端な例では、質問用紙に直接回答を書き込ませるといった者もいる。

今年度、合同授業をした教養科目のクラスは「日本語教育概論」で、事前にコミュニケーション力をつける教授法を扱い、タスク練習のビデオなども

見せており、今年の日本人学生は例年よりこの活動の意義をよく理解していたと考えられる。

だが、多くの日本人学生にとって、外国人から日本語で質問され、日本語で答えるという経験はほとんどなかったようである。インタビュー活動前にして、期待と同時に、本当に意思の疎通ができるだろうか、どう話したらよいのだろうかと不安を口にする者もいる。活動後のアンケートの「留学生と話す自分自身について気がついたこと」の項目には、以下のようなコメントが毎年見られる。「説明しようとするが、その説明の言葉がまた難しくなってしまった」、「易しく言おうと思うが、どのように言ったらいいかわからない」、「正確に説明しようとするほど、言い直しや挿入句が多くなり、ますます分かりづらいものになった」、「話しているうちに自分が不自然な日本語を使っているのに気づいた」、「つい、方言で話してしまい、共通語がなかなか出て来なかった」、「自分自身が正しい日本語を話せていないようだ」、などである。

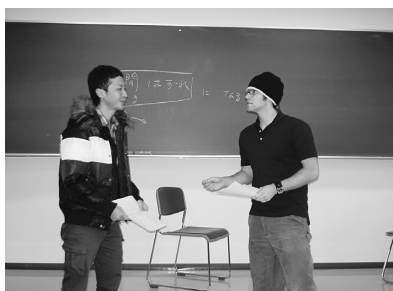
日本人学生が、言語面に集中する一方、非言語コミュニケーションには十分注意が払われていない場面も見受けられる。日本人学生本人の意図は不明だが、腕組みして椅子の背にもたれかかかって話す態度から、拒否されているとの印象を受けてしまった留学生もいる。また、質問している留学生と向き合うのではなく、日本人同士でその質問についてあれこれ言い合っている様子から、馬鹿にされていると受け取る留学生もいる。

これらコミュニケーションの不適切な行動については、活動後に具体的にフィードバックすることで、異文化理解を深めることができる。

2. 3. 2 ロールプレイ

1) ロールプレイの手順

インタビューに続く2回目の交流活動として、ロールプレイを行っている。インタビューと同様に日本人学生のグループに留学生が1名ずつ入る。そこで、ロールプレイの設定にそって、シナリオを考えていく。実際にプレイする日本人は1名だが、シナリオ作りには全員が参加する。作成したシナリオ



日本人学生と留学生のロールプレイ

は、3、4グループが教壇で発表をする。

教員は、留学生には未習と思われる表現などを取り上げて解説を加えたり、コミュニケーションの仕方の違いを具体的に指摘する。ロールプレイの内容は、話しやすいテーマであること、留学生の日本語力でこなせるものであることを考慮し、次のような内容のロールプレイから3つ程度を行う。

2) ロールプレイの内容

①ウォームアップとなるロールプレイ

最初は自己紹介を兼ねて、日本人学生から留学生に尋ねるもの(例1)や、反対に留学生から日本人学生に聞くもの(例2)のロールプレイをさせる。ロールプレイは通常2名であるものだが、このロールプレイはグループの全員が参加してよい。

例1) 留学生の国へ行くことになった日本人が、留学生に国のことをいろいろ質問する。

例2) 日本でのアルバイトについて、日本人の助言を求める。

②常識や価値観の違いに気づくロールプレイ

ステレオタイプを問い直す目的で、以下の例1～3のロールプレイ後に、グループで常識や価値観の違いについて話し合う。

例1) 飲み会で、日本人から血液型は何と聞かれたが、留学生は自分の血液型を知らない。日本人学生は、血液型と性格の話題について説明する。

例2) 身内を人前でほめるか否か、というテーマ。大学生(幼なじみ)の親同士が会って、互いの子どもの近況を話すという設定。ロールプレイの親役には自分の親を思い浮かべ演技してもらう。

親同士が、互いの子をほめるのは共通するだろうが、我が子を人前でほめるか。あるいは、我が子を謙遜の意味あいできなすことがあるか、について話し合う。(このロールプレイは、日本人同士をペアにした場合と、留学生と日本人学生をペアにした場合の両方をさせて、両者を比較する。)

例3) 相手にやや言いにくいことを交渉する。例えば、ゼミの忘年会に出たくないという留学生を、幹事役の日本人学生が誘うという設定。幹事の説得に応じるかどうかは、留学生がロールプレイの中で自由に決める。

同様の交渉を、アルバイトを代わってもらうという設定で行ったこともある。

3) ロールプレイの意義と留意点

ロールプレイは異文化理解の葛藤が起こりやすい状況を日本人学生と留学生の双方が、異文化理解を深めるという目的で行われている。アジア圏は身内をほめない・欧米はほめるというステレオタイプがあるだろうが、実際にロールプレイをさせると、そうとは限らない。欧米出身の学生でも身内をほめる人、ほめない人がおり、個人差がみられた。

しかし、③の頼む・断るという交渉事のロールプレイは悪いステレオタイプを助長する事例が見られた。同じコンビニのバイト同士の会話で、一方が忘年会の出席のため担当日を替えてほしいと依頼し、他方は断るというものだった。依頼する側を留学生、依頼される側を日本人学生にあてていた。執拗に食い下がる留学生と防戦一方の日本人学生という図で、あまり気持ちのよいものではなかった。依頼する側のこのようなアグレッシブな態度を、外国人の率直さと安易な解釈を導いていた。

ところが別の年に、たまたま役割を逆にして、日本人学生を依頼する側にした時、まったく同じことが起きたのである。ひたすら断る留学生に対し、幾度も迫る日本人学生を見て、状況の設定が適切ではなかったことに気がついた。依頼して断られれば、通常はそれで終わるだろう。しかし、ロールプレイである程度の長さを持たせるには、どちらも1回で引き下がる訳にはいかないのである。それを、結果的にどちらかが相手を言い込めるまで続けさせたのは、誤解を生みこそすれ、通常のコミュニケーションとは言えないものであった。要求をのまされた方は、架空のこととはいえ、不快感が残った可能性がある。

留学生と日本人学生の交流を目的としたロールプレイでは、状況設定を、上記①のようなウォームアップとなるものや、調整し合って何かを決めていくような建設的なものの方がよいだろう。あえて頼む・断るというような状況のロールプレイを行う場合は、誤った固定観念を助長しないようフィード

バックを十分に行う必要がある。

3. おわりに

以上のように留学生と日本人学生の交流を目的に、教養授業と日本語クラスの合同授業を学期中2、3回行っている。

留学生と日本人学生との合同授業はこれまでもいくつか報告されているが（土屋、徳井、門倉など）、一般にクラスの使用言語を英語とする場合も日本語とする場合も、それぞれ上級以上の運用能力が必要とされ、これが合同授業を行う上での制約となっているのではないだろうか。本稿の試みは、日本語力が不十分なものの日本人と日本語で話す機会がほしい留学生に、その機会を提供すると同時に、外国人との接触経験の少ない日本人学生に安心して母語で留学生と交流する場を作り出している。

ほとんど日本人学生と話したことがない留学生にとって、この交流活動に対する満足感是非常に高かった。もっと積極的に日本人に話してみようという自信にも繋がったであろう。

日本人学生側にとっても、一度も留学生と話したことがない人が多いが、実際に留学生と会って日本語で話すなかで、外国人に対するステレオタイプやメディアのイメージを通して見るのではなく、目の前の一人の個人として見ようというきっかけとなっているようだ。

大学の留学生数の増加は大学の真の国際化推進の指標とは言えまい。留学生と日本人学生との交流を活性化するためには、個々の学生の積極性に期待するだけでは限界があり、互いの橋渡しとなるような仕掛けとして、このような合同授業は一定の意義があると考えられる。

注

- (1) 学生が選んだテーマは、日本人大学生のアルバイト、旅行、自分の国のイメージ、就職活動、結婚と仕事、日本人のお酒を飲む習慣、外国語の勉強、ペット、熊本弁、家庭での女性の役割、家族の呼称、など。
- (2) ウォーカーは、シンガポールの大学生と日本人小学生・高校生の交流を通して待遇コミュニケーション教育を行っており、交流後に日本人のスピーチスタイルに関する「気づき」を記述させているが、その記述量が、コミュニケーションセッション参加者よりも観察者の方が大幅に上回っているという。

- (3) インタビュー活動の後、宿題として、以下のような質問に答えることで振り返りの機会を与えている。
1. どんな留学生と話したか
 2. 留学生の日本語はどうだったか
 3. 留学生に対してどんなこと（日本語以外）に気がついたか
 4. 留学生と話す自分自身についてどんなことに気づいたか
 5. その他、意見、感想、提案など
- (4) 園田、他（p.14: 2006）では日本語研修コース生が日本人学生にインタビューするという交流活動を行っているが、日本語初級段階の学習者は日本人の答えを聞き取ることに精一杯で、尋問調になってしまうという。それを避け、話題を発展させる方略として、あいづちや聞き返しなどの事前学習が必要だと述べている。

参考文献

- ウォーカー泉（2011）『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育コースピーチスタイルに関する「気づき」を中心に－』スリーエーネットワーク
- 奥村圭子（2005）「異文化間コミュニケーション教育における内省の活性化」山梨大学留学生センター紀要1
- 梶原綾乃（2003）「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117号 93-102
- 門倉正美（1996）「留学生と日本人学生との混成クラスの試み－教養教育『異文化コミュニケーション論』授業報告『横浜国立大学留学生センター紀要』3号 55-67
- 園田博文・奥村桂子・内海由美子・黒沢晶子（2006）「留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの－「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて－」『山形大学紀要（教育科学）』第14巻第1号
- 田崎敦子（2005）「日本人学生の異文化間コミュニケーション能力の養成－英語を共通言語として行う留学生とのグループワークを通して」『広島大学留学生教育』25.69-81
- 土屋千尋（1995）「留学生・日本人学生混合クラスで学ぶ異文化コミュニケーション」『日本語の研究と教育』468-485. 専門教育出版